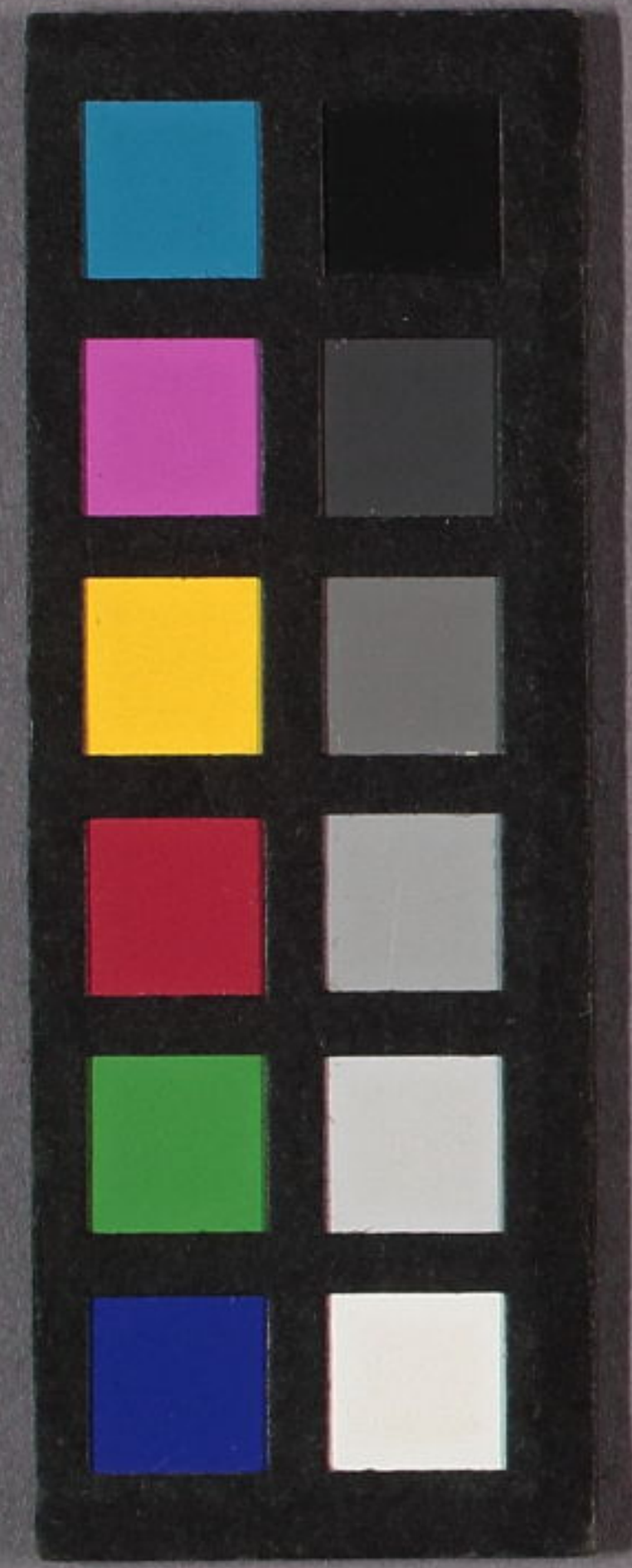


大千世界樂屋探初編
下

13
734
3



18
734
3



有情大千世界樂屋探初編卷之下

江戸戯作者 式亭三馬戲編

却説老波女鞍を扑て曰く移り好曲院欲心貪着信女

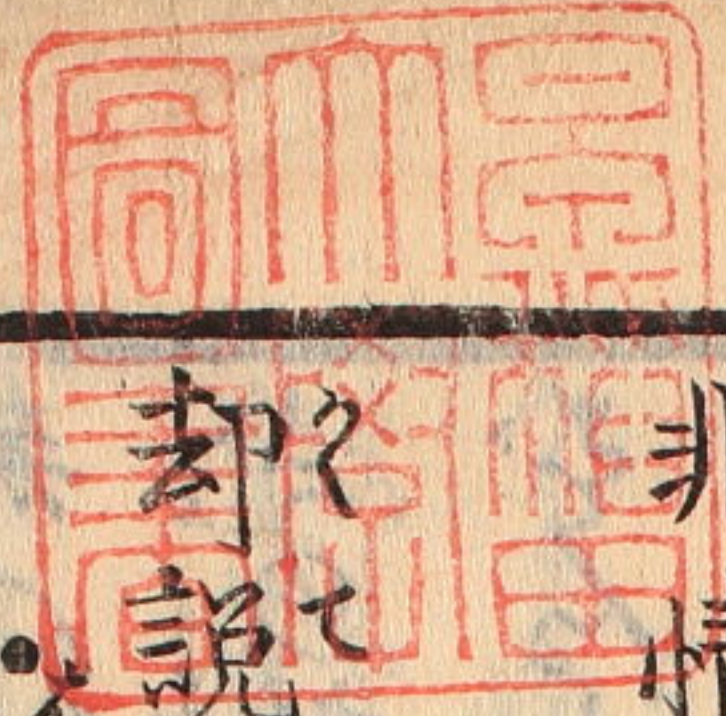
やして憚あがる夫人と宗首が遠くお寺も別くござん

はと私を代く院号夫人と釈妙譯しもて三笑あつち

別く集りはるるきとてアお聴あるてむしはし

草市の買あつちお佛器のお磨物うら精天棚を

製するやうとて居る時とありしころもつひと



そのついでに買立く皆私ひとりのお役ま。今年も着の者が
侍合でゆ程ふこととさるうとあつて。十日のちと往て
偷足をしと取らふが娘の尻へんくと日があつふ。二葉よ
なる兒をこらけぬ。あつて暗くの朝蔭ご申郎どのを
奇つた。草市よまき所が為馴れ入業ごうう。雞ひま
ごの枚葉ごのと益もまね物を馬よ附る程買はぬ。
とんと裡口の戸を外と井溜へ持往て草物入を掛
とららぶ。お盛物と柿香袋を十分濡れ

ま申し。我もよ藤おをまらうぐ。疝積をぬぬ。ま
う。嫁よあつり眼さ。又嫁どのがおいどののせよはと
達者で。他に三言らふと十言で返答をかくものさ。サア
それう。夫婦喧嘩の娘。お長家中がからて先かあを
盆のこまじう。お返よ景見しな。おと。静のはら。が
口小言をひく。棚を勝らて。まじりあま。らん見徳
の悪の精霊を移入。さうとやんか。ておんじ。よ。愛は行じ
掛地を踏ひける。ちや。移入。ゆ。更。か。つ。出。せ。と。い。ん。ど。い。し。エ

ころからあつて移入よ。あの掛物の海きんが行亦りきりから。
 せ後んこが移入けいさうしよ掛物亦りてりく。老人ハ
 不断がもくこころをせすれど。あんな財を婆きんが移入と
 まじきまじかこののこひかど。ホニニく二人あつて悪ましく
 とりあひのぶたましく。盆よよどねて後羅を燃してゆりまを
 のきりこころ目のまのの中とよめれと。聖が日月を移入りさ
 ばららあつてめいと云てまの移入が。案の定その通り。夫
 ごとく芋菓和も温索麩も生すりて。園子も移入を

換くが面倒ごとく。アノそれ精具さぬのお迎園子。お迎ひ
 園子と奏してめいへのを買てゆるミ。精具さぬの蓮飯
 く。お地まきお上りさの。精具さぬの蓮飯と呼めくを
 ありがこころの買てゆるミ。私ともいさか。園子も
 蓮飯も食ぬ。子。せめて私のお飯で芋菓和の案うさ
 正。温索麩でもなべようこめひの対脾干よさねて。飯り
 ほとが。ホニニく。まろとめり。目がら。と。

大徳院法衣本時居士と名のり。一坐をこころを。

大徳院法衣本時居士と名のり。一坐をこころを。

徳。はさぬの。

通の魂たまはの糸いとの遠とほを世万の爲ために説と書物あきりなるは
 こころの孟蘭盆うらぐんの献けん借け我がとらふひんがる本ほんもあつて
 漢文えんぶんで書かこののさほぐめれど、て用もちひぬ。ちんねで
 改あらたぬ。廉れん賤けんを方かたと是非ぜいひもあつて、まら百ひゃくく子孫しそん
 警けい昌しょうを祈いのぬ者ものもなく、子この自みづかの者もの、他人たにんの子こをまらて
 家督かとくとさるも、昇のぼ竟まけ先祖せんぞのあを絶ととす、心こころのゆる
 むるまら、よら子こ孫そんる者ものをまらと。日本やまの
 神道しんどうであつと。威いを唐山たうざんの儒法じゆほうの通とり母はは奇き戒かいとく

あつと。又また天竺てんてくの佛法ぶつぽうの説と中ちゆうてあつと。つごつ後の
 おのむく、西せいをりてあつと。つごつ中ちゆうもなん孝子かうし順孫じゆんそん
 さうせん人ひとのつごつ世間せけん法ぽうは二季にきの彼者かたや盒はちの節せつとら
 人のまらある身みなるも、我われもかて、膝ひざもとら。厚あつく
 敬けいとらあつと。きさきとら。はと。あつと。お、世よと、田でん用ような
 文字もんじを護まもむ人ひとあつと。何なにの彼かたのと高たか上じやうな利り屈くつをりいりて。
 君きみ柵しやくを祈いのぬ者もの、たし、美みひたま、世間せけん法ぽうは、精せい具ぐ柵しやくを
 勝かちつても、女童ちゆうどうや家け頼たのまら世よの投なを散さん宝ほうとら、儒法じゆほうを

祥月よあつらふこと一日の齋戒もせよ我才の栄耀も
 百金を費と人りまうしむりやとせよ坐る表家も
 居て九二万の棟割もよ行ふ者の親や祖父の忌日や
 とく油揚一枝買て具供よ備ふなごん眞実の親玉にて
 先祖の精霊もられぬおとさうきやせう只巻角まんせ
 うけの浮虚信考でさあかぬ具魂も少く料理が不味
 てもあつらふ受らぬはせぬ候令七五との高
 盛をさう入らねごとて眞実うま向てられぬ店櫛

勝つてある賣物同様でせん快心精霊でも受まらぬや
 まん又実作られぬ精霊の軟をとて定りかねぬが
 本のてんを何よよらばはさうする料理をしてくるが
 はららの孝慈その上どうぞけ方亦が邂逅の遠道故る不
 二季の物さごとてさうる玉面の為さうて七夕あよるを
 さましくて益するの一件よしてさうらひてそのごも折角
 事ても債ととの喧嘩を覚えてさうてくつらぬあつたま
 折み焼たの火と一統よ消てさうらひてハチふれとも

平日をよく心づく。一日もあつおそまき。酒は酔ふまうせそ
先くく人をあつまき。夜泊りの翌日を宿酔の頭痛
抹額朝露をまらり。牛睡をまらり。食物好は小生ひ跡を
減く。益の友を呼集めてどひびく遊む。心ち
刃上を不都合なるはと。ナす。うま。その正をおそ
情で家道をよく細め入とれが。盒あも公静。勤りま
うらうらくと刃を拵崩と。家がなう。好う。精其の遠く
まてお笑。うく十四日。ゆれもせど。檀那寺へ行。心ち

時々の音信がなう。身とあつ。居候様で。陰の
目膳を食く。とどく。とる。精其仲間の恥。まから
業さ。し。や。ア。どのやうであらう。と。あ。ひ。が。非
子孫よ。か。ま。う。の。それ。又墓詣。さ。せ。車。も。後
それが。角。死。ぬ。の。と。獲。と。え。ま。と。と。て。魂。を。な。ど。ら
其。日。ぐ。じ。の。陰。の。者。が。志。り。厚。く。生。の。実。は。す。る。お。ち。ま
書物。でも。人。が。俗。説。の。方。便。の。と。廉。略。の。ま。た。う。た。う。は
たと。朝。夕。の。食。を。と。り。て。老。を。と。り。て。人。の。心。を。な。さ。す。

俗^{ぞく}づらる愚^{おろ}づらるしそれさうて備^{そそ}うん苦^{くる}らうなれど
 其人^{その}を必^{かなら}と律儀^{りつぎ}よ身^みをよく知^しるものぞとぞうのなとが何^{なに}
 中^{ちゆう}流^{りゆう}の緒^つ禮^{れい}自慢^{じまん}中^{ちゆう}飯^{はん}を食^くあも茶^{ちや}を飲^のむも湯^{とう}碑^ひを
 して人品^{じんぴん}と作^{つく}とぞ身^みを持^{もち}崩^{くづ}して流^{りゆう}浪^{なみ}して何^{なに}の後^{のち}あも
 まも万^{まん}能^{のう}ひ達^{たつ}して一^{いつ}らぐもぬゆる愚^{おろ}づの俗^{ぞく}づめと誘^そと人の
 所^{ところ}中^{ちゆう}食^{じき}客^{かく}とらるが回^{まわ}ゆるとき何^{なに}ひらうもぬ身^みを中^{ちゆう}座^ざ
 律^{りつぎ}儀^ぎよ先^{せん}祖^その身^みが身^みもるとおひらうて中^{ちゆう}地^ぢ走^{そう}とぞ先^{せん}祖^そへの
 終^{はつぎ}儀^ぎ大^{だい}扱^{じやく}してサ^い類^{るい}花^{はな}切^{きり}の人^{ひと}とらめのでうもぞうのやせう

惡^{わる}口^{くち}をさうくあざいらふ行^{ゆき}過^か者^{もの}へ先^{せん}祖^その恩^{おん}あづむの惡^{わる}親^{しん}
 とおひあづむ●金^{かね}換^かり●實^{じつ}は我^{われ}扱^{じやく}てとぞうも此^{こゝ}精^{せい}灵^{りゆう}乃^の詞^{ことば}大^{だい}
 用^{もち}してある心^{こゝろ}なうがたとひ孟^{もう}蘭^{らん}盒^{はく}經^{きやう}をんぞとぞうと
 心^{こゝろ}の危^{あや}し親^{おや}兄^{あに}身^み先^{せん}祖^その身^みがとぞうとぞうととぞうととぞうと
 一^{いつ}口^{くち}の物^{もの}も自^{みづか}身^み使^{つか}へん満足^{まんじつ}又^{また}裏^{うら}店^{てん}や九^く尺^{せふ}店^{てん}のも扱^{じやく}な
 家^{いへ}と別^{べつ}な棚^{たな}を治^ちるあも及^{およ}ぶぬと物^{もの}入^いりお喜^{よろこ}ぶあのせ火^ひの
 用^{もち}心^{こゝろ}もつる今^{いま}勝^かるあのみ形^{かたち}が佛^{ぶつ}經^{きやう}も神^{かみ}儒^{にゆう}の作^さ法^{ぽう}あも
 みかぞうのし持^{もち}佛^{ぶつ}堂^{だう}でも堪^えぬとぞうのほづも盒^{はく}家^けの無^む益^{やく}の

物入さしよ心の裁が肝をさるるに揺らさ秋まかりふとむりて
 其人の母でめりものを手向が近道たむけ ちうまち 儀行▲さうらさぐら女郎ぢやうぢやう
 買が好ごとて女郎をま向うめもおもふこと鬼六 げのしや■鯨舎がうらま
 ちく。棚経は三線を弾もおもふ移くこと金次 せんま●七つて間麿
 さほもまらむむ燻ひ使者の精気く惡態と侍らるる
 りのそふんえらるるひよあつさるる物さの本 本醉●まづ冷どる所を
 邂逅の客とさるるこ入るふ壽暗の回く進むるなやふ
 みるのさ別と老人と目くらうらうらまことふん

本醉 ●ふへーの盆ぶらりであるの年中いづくすめいめい
 古の精気達のしころ話き師をも大世目張の母靈中らうが
 あらざる鬼六 とうくちり■虎角債主の縁が深ゆ金次●その証候と
 歴くの書物ゆも記とあること又古きゆゆも縁えん
 ぶあるさうだが是と博試よゆとえさるる△その極月の
 寒天よさ入るゆもの七月の日の水に付よ母と中々此方
 のはむる見とさるるゆの債主よ茶を号るゆらゆ佛頂
 面をさるるゆらゆて圓子ゆ使らるる●あまのゆさ入本醉

十六大用豆と茄子の胡麻和を製衣うぐら。嫁と姑のうぐら
合ひ。索麵のいぞかぐんうぐら主婦喧嘩の大せりの合ひ

けしきうてろくお送り火も焚ね不あいらひ。イヤヤこを

ゆめまの平浪の利屋京樓の字せんばらやア移入が女房の

乱氣でけしきうてろく。妻乱しよ

○佛の口器で銅梳トハかきりぬとらふ。洞○東山の湯火で火字

あかすあぶちあぐの借詞さうひんたふのあつとく

よのうひまじ酒蔵なる。○中家せんが。○字せんきよよら

のあつとくあぶちあぐの借詞さうひんたふのあつとく

トよが束持のあぶちあぐの借詞さうひんたふのあつとく

のせまほとくあぶちあぐの借詞さうひんたふのあつとく

とあつとくあぶちあぐの借詞さうひんたふのあつとく

語とならぶ。十の三の四の五の六の七の八の九の十の

のあつとくあぶちあぐの借詞さうひんたふのあつとく

形まのあつとくあぶちあぐの借詞さうひんたふのあつとく

情人あつとくあぶちあぐの借詞さうひんたふのあつとく

神めくろ亭主と居ぬ。但を獲る。亭主くとせざらん目の悪
 酒落で門はくろ写しむト。ひ方と店賃の二月分と売んを
 の才で黙算半おうくも移入西を附え氣で飛ひ中
 むぐろどいら花ぢもどる。後。ヨウ泣喬をば一別以事サアク
 むろとらちくく。まぐろ勢られませうどく。うろく恩唄の出
 楊が禪流と狼狽て。うの合方が。口力かなる中と大方八百等くら
 く。まぐろらうと。今朝の鳥影でも鳴く。うろく。モシ。け方の世界
 とあれ限う子。塵むめり。チトうきんが波をきるが。寔はね振る。

そりやア不候ぞ。トモシ。道芝の露の心緒あり。なを往く
 おまろのせえ。時。陸文台のあり。うろくで呼をれちやア素の
 て子。ヤ時おまろ冷なれ中。もあふと。大分冷まると子。めと羽童
 ひむら。火神の侍人お侍。のせえ。ヤ風流子。東公。遊大哥。おろく。お供
 どの。コッ何ヤお奇や。丁とお茶を。生むくらう。甚新渡の猪。うろく
 上。ア。ア。ア。ト。塵八百のおへらう。うろく。大にを。嫌。うろく
 ぬると。女房といふ者。が同く。一方の大將で。彼所謂。就の瓜と
 り。黄茶。お。船橋。お。仕入の。口取。を。ち。うろくと。牛。お。と。うろく。

菓子簞笥の坐頭申してめくふあこころ食後菓子
 已か物の減移へてごころ擇み撰て錢目なかりをり食中を
 大そむろり神あふも悪口を云た食倒と。その度く
 猶どつきく。到頭衣を着せ茶をりり菓子簞笥
 隠遁して世を憂と観とて居るのモ。ナント。あずり情中下
 移へてごころ。又他あもお客のあるり菓子簞笥を惜いとご
 幫間と菓子と欲いとおりふお客とる敷が罪人ご子。まう
 八股の丈蛇を煙壺お細くかうる大言で。コウあごこの中

座を室些廣げて柱込をたろり。向島の鞠塙
 和尚が所ろ梅樹を四五種と。秋の七草を一種づかて菓
 善中。あれを足りみ繕らう。祢布川や思ひく根峯の
 寮にト下竹りておる。竹が欲くる墨瀆の正福寺ろり。あ
 してやらう。和尚大知已。夏の夫井板か入るる竹路子
 の所ろ。到來の埋木中捨て如鱗木の鳥板を。三寸幅あて
 交張が雅ごらう。まら星やらあれが進上とを所まう。トキニ
 お二舟さん。先頃約束の櫛も小窓あをの甲八が。更令ごよ

とまひの対一も二分う濁く二もでさあうとままらなる
 幫間自切が切れて飲食の中身ころり。ナントアどらうど
 ころりませう。口客やど塵をつらぬ野幫間ス洒落るもど
 牙かてお客が塵をつらぬ。管生ささる幫間を塵も
 つらぬが牙かたらぬ。ナントお情さころりやアおせ入ません。
 金沢 いろは夫の現世の存情未可とあれねど持とおぢやう。
 死でもどめて借ころ世の中の存情あのまま葬れの供お
 立人をも何とど好遠をさから習禮の侍女郎をさるねよ

お寺へ往て待てゐるふどらうふ量見でござらう。●あいら
 が危くは謀のあつこのどテ彼老人るど足弱ゆゑ興一
 つらそのお歩行を息ぎれがして冠依そとてお寺へ先を
 往かゆくと隨ちま歩行れる。夫を血氣盛の仕が同
 中らふ寺へ往て吠をして待居る。大なる癡呆的▲葬送
 とも野送ともいふやうさう。往路を送るべき者ありの
 寺へ往て待受ちやア亡者に送るねるやうな物ど婚日禮お
 侍女郎のあつる。葬れは待野郎も好らう。新頭の後

天蓋で香炉や位牌を持せし懸くの葬れが途中の僅
 二十人といふ淋しい葬式といはれるが寺へ行く見ると
 待受が五六百人ナド癡呆と活ちやア秘入り立入ること
 だが強版の分量が遠くそれゆゑに子正お入る途申の
 指撥同様の人数ごうごう三百人おも飛くべ非人まで
 余り返らうとせむのにお寺でえねが五百人ぐう鬼六
 盛方がき轉りのさ先工待居る氣へとどろきりと盛
 中が俄に半減となりてとぎんと計りのかけは救済も

一膳つけと中が一本げけと多る片木と五百人あのとと紙へ
 五十枚買て置くどろと先の方へ空を借集めく
 二女目をお目かけるとれで足後付の紙へ盛を
 引捨かどる溝中と一構別とて切溜へ煮豆腐の山盛の
 五郎八茶碗の盃をみる向の極み路へ手向で湯桶へ入
 焔酒へ土籠へ入れの耐茶とる遠ねかうに土籠の蔓へ紙を
 結び付くといふが世活功を經て狂言の山さ▲まらんと
 まらんとよもいさ竹皮へ強版を包んで結目へ枚揚枝を

扱まんでどもなのら。礼れ式しきはし月づいとしん法ぽうごみ家けうしとらさ罪
のち重おものらのら。煎せん餅びやうをじ十二じふに支しちごづご一ひと袋ふくろよしてまをひと一人ひとり家
づひくのぐ有るま。意いのちれは案あんぢやアア秘ひ入いりの意い餅びやうを
土つち産うみもうらふは。是これは。穿う損ちんごらう。鬼六む餅びやうをしせんばまをん
縁えん者しやのせ施せうめまらとこ人ひとまで。二に度ど取とをさるらう。他人たと
奈な集じふちらうの等とのりさの終しゆと本堂だうご餅を撒からふ
あらもちれ秘く。金銀ぎん。それもちれぬでごらう。むくくと旅をが
家け別べつよちらておれはし歩あ行いと物でごらう。近ちか事じと寺すで

はしをららせてはくらでおるごらう。イヤハヤ短たんなしとめを
大だい玉ぎよくははらがおまままて山路ろくお宿しゆくへ上りままのごら
びびのはらら。略りやく義ぎうらら施うのおれを一ゆげままとままの
西さいを山若じやく分ぶんははららごらう。りままと山務むもおちんたらうのらう
ままとしららをまらうけ。袴を脱から強かう飯はんを袂に納めらら
早はやくおままてぬる。お書しよへ先人せん往かうごらう。連中れんちゆうの袴をとりままとお
後ごの上へまらんご後園えんでままと。後ごくらうと押おして出で出で出で
風かぜもしておるごらう。おままと三さん折せつと隣の小糸いとの風をままとへ

かりがあらぬ。ゆゑに、金銀●我々の施すも家
 別は返れども、かゝるかりのものはと死でゆく身は、かゝる銚りしふねと
 ゆる人数の多少、道中の用も、かゝる困のかまらぬほど、かゝる跡は、かゝる妻子
 眷属と俗に交りてゐる。ゆゑに、かゝる世間の口をどうもさぐるぢやま
 ぢやう。是も、かゝるおぼろぐよふ、かゝる分の花美を、かゝる種も、かゝるなむでさる。
 おのゝ者も、かゝる信を、かゝる質素を、かゝる公けり、かゝる専一の法を。我、かゝる他の
 葬送と、かゝる射律儀、かゝる樂小流て、かゝる往々、かゝる他も、かゝる我が葬送の射
 樂、かゝる添て、かゝる供と、かゝる是事と、かゝる己が、かゝる善信なれ、かゝる他も、かゝる又善信とする。

自かゝる精かゝる冥かゝるを、かゝる廉かゝる未かゝるに、かゝる其かゝる報かゝる忽かゝるち、かゝる未かゝるよ、かゝるさ、かゝるは、かゝるけ
 一切、かゝる精かゝる靈かゝる世かゝるの中かゝる、かゝる他かゝるの、かゝるワかゝるるかゝるまかゝるらかゝる、かゝるあかゝるらかゝる、かゝるこかゝるもかゝる、かゝる他かゝるの、かゝるつかゝるらかゝる、かゝる我かゝるが
 けかゝるきかゝるなかゝるれかゝる、かゝるトかゝる、かゝるひかゝるらかゝる、かゝるかかゝるらかゝる、かゝるあかゝるらかゝる、かゝる各かゝるもかゝる、かゝる我かゝるもかゝる、かゝる再かゝるびかゝる、かゝる沙かゝる婆かゝる、かゝる安かゝる小
 生かゝるを、かゝる泥かゝると、かゝる公かゝるを、かゝるまかゝるりかゝる、かゝる入かゝるて、かゝる動かゝるや、かゝるせかゝるう、かゝるサかゝる、かゝるくかゝる、かゝるこかゝるれかゝる、かゝるらかゝる、かゝる靴かゝる色
 を、かゝる解かゝると、かゝる團かゝる粉かゝると、かゝる白かゝる紙かゝるを、かゝる擇かゝる分かゝるらかゝるれ、かゝると、かゝる跡かゝると、かゝる有かゝる縁かゝる、かゝる世かゝる、かゝる孫かゝるの
 別かゝるれかゝる、かゝる靴かゝると、かゝる二かゝる十かゝる六かゝる夜かゝる、かゝる諸かゝる所かゝるの、かゝる敷かゝる筵かゝると、かゝる生かゝるを、かゝる変かゝると、かゝる首かゝる為
 轉かゝる、かゝる夏かゝるの、かゝる世かゝるの、かゝるのかゝるりかゝる、かゝるは、かゝる精かゝる靈かゝるも、かゝる舟かゝる中かゝると、かゝる團かゝる粉かゝるの、かゝる威かゝる勢かゝる、かゝるかかゝる、かゝるあかゝるらかゝる、かゝる及かゝる、かゝるがかゝる、かゝるね、かゝる南かゝる無かゝる、かゝる河かゝる、かゝる霜かゝる、かゝる池かゝる、かゝる佛かゝる、かゝる南かゝる無かゝる、かゝる妙かゝる法かゝる、かゝる蓮かゝる華かゝる、かゝる經かゝる

むろりわらも氣がまろ移せ風が回てちると休まうとあや
下ろ酒市がよめてもてむきふと志やアがる別ちやア移
風車の名代形造よ今夜もよと小二めり目終しつら
いせ火の見の筆末へ登りておれが天窓へつるうつて居るうけが
嘴と尾を折とさッせれもつるね支離よるやアがるせり
すの全体もらが骸と震の内の居ゆの細までおるくつら
うら実う後屋のぬ人もなり今ちやア居ゆハ居と療治の
於所が移へ●とんと災難がわりのどのあう一ゆ所の小二も

悪うづうとさうよ今でこそ番頭なれおらが店の丈ハ
後が森小便をこれと時分とさしてまゐらうづう者も棟尾
の上を走渡つておれが天窓へあがつてのさ光明丹でもどが
面を彩りお坊さんの顔へはけと今箔の余りをおでまて
おれが眼を涙箔よあうり社慰を物おめくらけが速い物ご
りの向あう番頭さばらあて丈きる面をくわぬその
面の丈きさめを負移へがおれいらりすでも虫尾と志う
人を不目おえて丈きる面で睨付と心どろろ母松この

見^見あれも高^高く泊^泊りて居^居るが。苗^苗世^世めらむ移^移入^入老^老角^角標^標と
低^低くして下^下りて這^這入^入ちやア南^南村^村細^細く移^移入^入よ。タカあり
たらの年^年もあちやアそりやア昔^昔もあ。●どうしと昔^昔もあ
りん。業^業忍^忍瑳^瑳伽^伽の過^過度^度が好^好くも仍^仍て下^下しなれてうら丁^丁ど
百年^{百年}目^目ごまを免^免れらうらあれも家^家らう老^老年^年よ。今^今村^村の新^新
尾^尾まらうアまきんでも考^考さおれまらうのせ移^移入^入▲見^見そのとき
むらりの生^生質^質が丈夫^{丈夫}向^向ごものを銭^銭が七^七貫^貫とあれば小^小判^判
二両^{二両}よなんの時^時と。今^今一^一両^両よなる村^村とる尾^尾まらうとご十^十人^人ての

物^物が遠^遠くふ昔^昔き●おらが若^若の時^時ハ門^門柱^柱も鬼^鬼尾^尾と重^重とそん
だんけが今^今ちやア鬼^鬼尾^尾の名^名をうらで鬼^鬼とつひ移^移入^入それごとく
今^今の人氣^{人氣}も合^合まであれも漸^漸くお老^老老^老をうら。ナニサ。體^體も入^入
お夫^{お夫}うら。おの移^移入^入るど申^申有^有るふらやア移^移入^入け町^町内^内の屋^屋上^上
申^申く。万^万八^八の土^土表^表と伊^伊勢^勢小^小次^次の店^店表^表と。あれむらうが古^古の
りのは箱^箱棟^棟とる云^云は流^流よんせうけるのと林^林額^額通^通り状^状
矢^矢候^候ももして工^工手^手間^間をかけるのハを母^母の物^物物^物でおら
若^若の時^時分に絶^絶て移^移入^入ことと。コレんがせ入^入爰^爰の屋^屋上^上も

ちよと〜土着の生草の、あの亭も不経家ごと
 へ。お三どのも同じく指さ。ア馬瓜と止がり。指ね。劣りのよ
 不便な〜^鬼●世の中後うら〜とてゐるとよ。あど直白
 とりふれど上うら座下もまんざらで移入ストリヤ文涼と
 出ろけよらう。うら。そら〜風が出てま〜ア〜風ご
 か〜とらうとらうて
 吹てま〜ト〜^鬼●ア〜彼〜人〜を録を四百歳し
 とせ^鬼ト〜ト〜^鬼ト〜と風〜母眼ごのう。よくあ〜が

筆耕

ええらぜ。ア。ア。折助とぐふ拾ひ。●今運の好折公。ハッ。
 ろら〜よ。ハッ。ホ〜風〜^鬼●
 生る。噴鼻の生る傍よおれの故障ごの。●塵の移入。ハッ。ハッ。
 ア〜心〜^鬼。○フム。道行こそ鼻孔
 〇〜^鬼。避暑とらうとをよありし戯笑
 夏をよ〜^鬼。三馬
 扇暑とらうとをよありし戯笑
 三馬
 蝙蝠が〜
 筆耕石原知道

大千世界樂屋探初編卷之下 畢

筆耕石原知道



式亭三馬著述讀本數種雙鶴堂發市書目

流轉阿古義物語

前編五冊既出
後編五冊既出

あこがれ浦おひく細のなびまらね
何ふらま一平次が夏跡をまじ
なほありほき給入よみ本の

客者評判記

初編三冊既出
後編三冊既出

役者評判記の引取し見物の
いづくさあは後者のいづく評し
たるききき入よみ本のなり

忠臣藏偏癡氣論全冊既出

忠臣蔵の人物は善悪邪正
さうさまのをのり屋を論を
まらけきき給入よみ本の

癖所語四十八癖

初編二編既出
三編當春出来

世の中にあのりつる人の
各々の癖を細くわらわちて
其人のあつたを同あつたる
いづくさあは後者のいづく評し

田舎芝居忠臣藏

初編
二編 出来

田舎寺の本ききあつたのりつる
おあつたのりつるがらも其あつた
まのあつたのりつるがらも其あつた

雙鶴堂藏版書目

江戸田所町

鶴屋金助梓

五山堂詩話全二卷

奇と妙とナル詩ノ話ヲ
アツタレバ詩作ノカド
ナルキ面白キ書ナリ

全二編三編四編五編六編既出

珍ラレキ詩ノハナレ並ニ
自作ノ絶句百首ヲ輯
ンテ初心詩作ノ便トス

詩聖堂詩話全一卷

天民先生著

全百絶全一卷

合刻

醉別帖

廣澤先生書

全一卷

伊勢物語

いづかる大字
全二冊

尺牘帖

東江先生書

全一卷

早見道中記

懐中本
全一冊

小學句讀道春點大字全四冊

世ニアル小學ノコトカリ謬誤ニ詩シ
大字ノ善本ナリ江戸版ト御尋給ハ全

草書法要全二本

漢魏六朝ヨリ唐宋元明ニテ諸名家ノ
草体ヲ諸法帖ヨリ摹勒シテ書引ノ類聚ス
ヤハ其ノ字ヲ搜ニ思フ時毎巻首ノ檢字ヲ
見レ其ノ卷其ノ葉ナルヲ早ク知シ其取ニ至リ
イハク字體備バ其好ム所ニ從ス凡草體
ヲ求ル速ナリ此書ニ引レテ早引ノ別号

一名草字彙

別号
早引
草字彙

東都 劉子著

增補曆略註

全一冊

此書は、（以下に詳細な注釈が記述されている）

十返舎主人撰

諸國書狀差

懐用小本 全一冊

此書は、（以下に詳細な注釈が記述されている）

字函

集成 增補節用早指南大全

横切大冊全壹冊

此書は、（以下に詳細な注釈が記述されている）

滑稽之嶋土産

十返舎一九編 初編二編三編合五冊

客者評判記 式亭三馬作 歌川國貞画

菟道園

東揚庵光編 全五冊

忠臣藏偏癡氣論 式亭三馬作 歌川國貞画

流轉 阿古義物語前編 五冊

式亭三馬編 歌川國貞画

公子行

廣澤先生筆 全一卷

艸花略画式

蕙齋筆 全一冊

蘭亭序

同 筆 全一卷

略画早指南

初編 全一冊

寬齋百絶

全一冊

獨學

二編 全一冊

詩聖堂詩集

窪天民先生著 全三冊

同 獨習古

三編 全一冊

後山庭訓往来

全一冊

江戸大繪圖八枚經十枚

御文章自在 月齋筆 全一冊

御家流 當用諸文章 横切本 全一冊

俳諧寂榮

春秋庵白雄著 全三冊

此書は、（以下に詳細な注釈が記述されている）

文章達筆 長雄東雲筆 全冊 新刀角力銘盡 一枚摺

長雄女今川 百瀬耕元筆 全一冊

百瀬隅田川 同人筆 全一冊

長雄新消息往来 宮澤東山筆 全一冊

長雄新年中用文章 佐藤對雲筆 全一冊

百瀬東風帖 野村耕舊筆 全一冊

長雄增補婚姻女國畫 岩岡耕洲筆 全一冊

長雄附庭訓往来 耕陶助穩筆 全二冊

袖玉 兩面 年代記 大奉書摺 永祿七年 一枚 疱瘡 請合 輕口 嘯 十返舎九作 全一冊

狂言田舎操 初編既出

俾るり本まきとせんのがくやとさか
せー田舎あやほりまきま好のあか
あまのりまけ復まのよれる本心

大千世界樂屋探 二編

初編よのせむる目録のちりり
あまのりのまきまのあまのり
すま年著述の上用板はあの上

人間萬事雲誕計 二編

初編はいくく世の中は
あまのりのまきまのあまのり
あまのりまきまのあまのり

文化十四年丁丑春正月開市

書物並錦繪 地本問屋 雙鶴堂 鶴屋金助上梓

江戸田所町新道

